

サイコロ

ISHIKAWA MERIYASU MAGAZINE

Special Feature

“

西尾工業史 連綿と続く職人の技と心

”



Column

私と石川メリヤス

News

「地産地匠アワード 2025」で優秀賞を受賞しました

no.

13



1.



2.



3.



4.

職人の技と心が連綿と 続くモノづくりのまち

「頼まれ事は試され事」。三河地方で繊維産業に携わってきた方がつぶやいた仕事論です。この簡潔な言葉を聞いたとき、なぜ私たちはこれほどまでにモノづくりが好きなかが少しわかった気がしました。

新商品開発やブランディングにも力を入れている石川メリヤスですが、会社の屋台骨を支えるのは常にOEMです。社員と話していても、「自分たちの技術を生かして求められたことに応えたい」という気持ちを強く感じます。他社からの要望をかなえることにやりがいを感じる私たち。「難しいけれどやれますか?」と頼まれたら、たいてい「やれます!」と答えます。職人とし

ての力量を試されていると奮起し、サンプル作りに試行錯誤する毎日です。主体性がない下請け体質とも言えますが、それが三河の風土であり、職人としての姿勢なのだと思います。

西尾市岩瀬文庫の浅岡優さん(学芸員)は、西尾の工業は「田んぼを作りにくい土地」と「矢作川の水運と水力」という2つの条件下で発展の素地ができたという仮説を語ります。

「江戸時代の主要産業は米ですが、米作に向いていない土地では副業をせざるを得ません。ここでは木綿、鋳物、瓦、花火、塩などの生産が盛んでした」

そのうち木綿は国内有数の産地となり、平坂港に集積して江戸に送る「買継問屋」が富商として勃興。資本の集中も進みました。幕末からはイギリス産の綿布や綿糸の流入で綿裁

培や家内工業(手紡績)は減少し、ガラ紡(和式紡績機)が発明されました。

当時、矢作川沿いには水運で栄えた中畑村を中心に多くの川船が停留していました。使い古された川船を紡績工場に転用したのが「ガラ紡船」だと浅岡さんは説明します。

「土地や建物を用意する必要がなく、何よりも水車を備え付けることで動力を得られます。明治12年、中畑村で船紡績が始まりました」

ガラ紡船が陸上工場に取って代わられてからも西尾市内の繊維産業の隆盛は続きました。石川メリヤスの設立も昭和32年です。

昭和40年代になると自動車関連工業が勃興し、現在に至ります。西尾市には繊維や鋳物、瓦の機械を製造・修理する技術の蓄積があり、その一部が

1. ガラ紡船

ガラ紡船は、川船の横にとりつけた水車を動力としていた。船の中央部分はガラ紡機を設置するためのスペース。後方が4.5畳ほどの居住空間になっていた。

2. 西尾市岩瀬文庫

明治41年に私立図書館として誕生し、現在は西尾市の博物館となっている。希少な古書から近代の実用書まで、幅広い分野と時代の蔵書8万冊余りを保存・公開。入館料は無料で、休憩室ミニギャラリーもある。

3. 西尾市岩瀬文庫の学芸員 浅岡優さん

西尾の工業史について語り合う浅岡さんと弊社代表の大宮裕美。考古学が専門の浅岡さんは主に西尾市の発掘調査を担当していますが、今回は近代の工業史を調べてくださいました。

4. 現在の矢作川と中畑地区

かつては無数のガラ紡船が停泊して糸を紡いでいた。現在は自動車関連工場が立ち並び中畑地区は、市内有数の工業地帯として知られている。



●が石川メリヤス 表紙『愛知県幅豆郡全図』より

自動車部品工場へと変貌しました。

「トヨタグループの源流企業は豊田自動織機であることはよく知られています。あくまで私の推察ですが、機織り機の扱いに慣れていた矢作川流域の技術者との相性は良かったはずです」

浅岡さんが例示するのは、工場内の道具の多くを自分たちで作って修理する習慣です。自動車を含む三河のモノづくりの特徴と言えるかもしれません。

矢作川が開削工事によって現在のような川筋になったのは江戸時代初期のことです。この川が輸送と動力という恵みを提供し、技術と資本が蓄積し、西尾のモノづくりの基礎を築きました。

西尾の地で作るモノは時代によって変わります。しかし、「頼まれ事は試され事」と張り切って現場に向かう私たちの姿勢はこれからも変わりません。

私と 石川メリヤス

1962年設立（創業は1957年）の石川メリヤスは2022年に設立60周年を迎えました。長くお世話になってきた方にお話を伺うシリーズの第8回は、石川メリヤスと同じ西尾市内でアパレルブランド「UZUiRO」を運営する青木淳さんと愛さんのご夫妻です。創業10周年の節目にお話を伺いました。

古着の草木染めから始まったUZUiROは、生地が足りなくなってからは近隣の機屋さんを訪ね歩いていました。その後、ニット小物にも挑戦したくなり、ネットで御社を見つけて訪問。2017年のことだったと思います。

三河地方の繊維産業ははっきり言って斜陽です。高齢化も進行しています。特に私たちが取引している家族経営の小規模工場では新たな設備投資や商品企画はできないところが多く、「何も変えないでいいので今ある生地をください」と言って買わせてもらうことがほとんどです。取引先が廃業してしまうと、まったく同じ素材は手に入らなくなるし、貴重な技術も失われます。私たちが商品化と販売の一部を担うことで微力ながら産地の維持に貢献しているつもりです。

この三河産地で、何事にも積極的な御社はとても珍しい存在です。私たちも商品開発の相談などで無理を言わせてもらっています。同じ市内にあるので、気軽に行き来でき、顔を合わせて話せる関係性がいいですね。地元産のリサイクル繊維を使った新商品「三河軍手」も素敵です。「地元を大事にするファクトリーブランドの戦友」だと私たちは勝手に思っています。これからも一緒に三河産地を盛り上げていきましょう。



綿の伝来地として知られる西尾市天竹町にて。この天竹神社も登場する映画の上映会（本紙裏面参照）も一緒に主催しました。

News

「地産地匠アワード 2025」で 優秀賞を受賞しました

リサイクル繊維の産地である三河地方の技術を生かした、ファッションにも実用にも贈答用にも使える手袋「三河軍手」。愛知県西尾市を拠点にファッションデザイナーとして活躍中の久保田千絵さんと弊社が協同開発した新商品です。

リサイクル繊維の特徴であるムラにこそポテンシャルがあると私たちは考えました。大量均一生産の糸では出せない、独特な温かみのある風合いがあります。この商品は、中川政七商店主催「地産地匠アワード2025」にて優秀賞を受賞しました。全国にある中川政七商店の直営店のほか、弊社のオンラインショップでも販売中です。



石川メリヤス
Online Shop

3サイズで7色展開。カラーネップ糸（色とりどりの繊維つぶが入った糸）を使用しており、選ぶ楽しさとアナログ感があります。

Editorial Note

三河の地場産業であるリサイクル繊維を使った新商品「三河軍手」を開発する際、当社がこの商品を作る必然性を探ろうと思い、地元の繊維産業に関する文章をいくつか読みました。そして、人々の実直な仕事ぶりに想いを巡らせたのが今回の特集「西尾工業史」のきっかけです。取材先の岩瀬文庫で1916年（大正5年）のわが町の地図を見せていただき、感動して今号の表紙にしました。

この地域は確かに以前から存在し、何世代も前からモノづくりの営みを連続と受け継いできたのです。自分たちが働く町の歴史が今を生きる私たちとつながっていることを強く感じています。（大宮裕美）

ドキュメンタリー映画『わたのまち、応答セヨ』 の上映会を行いました

愛知県三河地方にある蒲郡市の繊維産業の寂しい現在とあるべき未来を描いたドキュメンタリー映画『わたのまち、応答セヨ』。全国ロードショーは終わりましたが、多くの人、特に三河地方で繊維産業に関わる人が観るべきだと弊社は考えました。

地元のアパレルブランド「UZUIRO」と、映画にも登場する天竹神社の綿祖神保存会との3者で上映委員会を結成。地元繊維業者による綿製品販売、地域の子どもたちによる「棉クラブ」活動展示、映画に出演した鈴木敏泰さんの機織り実演なども同時開催。今後も、三河の繊維産業を仲間たちと一緒に盛り上げていきます。



11月16日（日）に西尾コンベンションホールにて上映会＆わたのまち市を開催。約160人の方にお越しいただきました。

画像：© ゴンテックス

Credit

表紙：愛知県幡豆郡全図 所蔵館名 西尾市岩瀬文庫
編集・執筆・発行 石川メリヤス有限会社
Art direction & Design 相田貴子 (Consulting Design Tokyo)

2026年1月発行

冊子名『サイコロ』とは

「メーカーの基本は何よりも品質」。
初代社長の想いが込められた創業以来の作業用手袋「サイコロ印」のブランド名から名付けました。
本冊子では、この精神を守りつつ、
石川メリヤスの「いま」をお伝えします。

商品問い合わせ&注文先

石川メリヤス有限会社

〒444-0515 愛知県西尾市吉良町富好新田紺屋堀 27-2
TEL 0563-32-0420 FAX 0563-32-3066
E-mail info@ishimeri.com URL https://ishimeri.com